秘祭

石原慎太郎

祭

石原慎太郎

新潮社

秘(ひ)祭(さい)

昭和五十九年一月十五日印刷
昭和五十九年一月二十日発行

著者石原慎太郎
発行者佐藤亮一
発行所株式会社新潮社
〒162東京都新宿区矢来町七一　振替東京四-八〇八
電話業務部(〇三)二六六-五一一一　編集部二六六-五四一一
印刷所二光印刷株式会社　製本所大口製本株式会社
定価九五〇円
© Shintaro Ishihara 1984 Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-301503-9 C0093

秘

祭

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あたり一面に散らばった暗礁の間の複雑な水路を教えるものは、原野の中の立ち枯れた樹のようにところどころぽつんと水中にたった杭しかない。それも杭から杭へ渡るのではなく、指標たちの間に尚、馴れた船頭にしかわからぬ浅瀬と深場が交互にあり、船は器用にそれをぬっていく。

彼が本船を降りた石垣島の本港の周りからしてがそうで、那覇からやってきた船は港の南の沖かけてはるかにつづくリーフを避け、島に近づくにつれそれまでの航路から大きく迂回し、わざわざ島の西側の東支那海に出てから入港していた。

本島からやって来るものを拒むように島の東側から南端にかけてつづくリーフは、実はさらに石垣から西に三十粁距たった西表島にかけての暗礁帯の一環でしかなく、石垣、西表間に点在するいくつかの離れ島を含めて、八重山と呼ばれるこれらの島々は無数で不定形な珊瑚礁に囲まれ

た内海に浮ぶ群島といえる。

それにしても、このひきこまれるほど澄んだ玻璃の水と白い砂、緑の島々の全景を空の高みから眺めたならどんなに素晴しかろうか。渡しの小船のいく航路の周囲の水の下にひそむ無数の暗礁は、驚くほど目まぐるしく鮮やかな変化で展開していく。僅かな水深の違いで、水中の岩礁は射しこむ陽の光を浴びてきらめいたり、さらには群がる魚たちの華やかな色どりまでを垣間見させる。と次の瞬間、岩礁は切れ、深い白砂の水底を映して虚しいほど青く明るい水がつづく。そしてまた次の水中に輝く岩礁、さらにその向うに突然浮き上ろうとする獣のように波に背を洗わせて現れる岩。

船端から僅かに視線を挙げると沖合いの環礁までつづく内海の水面あちこちに、その背にまつわりさわぐ波の気配を証しに水面すれすれにひそむ危うい岩たちがいくつも見える。そしてそれらを浮べた玻璃の水の連なりは、船が進むにつれ水中に移り変るものたちの気配を、千変の色に映してきらめきながらきりなく変化していく。あたりの海の光景は違った宇宙を予感させる。真っ青な星雲の光背の中に、突然ひとつひとつ違った輝きを帯びては現れ過ぎていく、惑星のような暗礁たち。

しかし一方、もし天候が崩れて時化た時、この竜宮伝説を証してきらめく海がどんなに凶々しいものに変るかも容易に想像出来た。あの遠い環礁を越えた波と風は、この穏やかな浅い内海をたちまち凶悪な罠に満ちた難所に変えてしまうだろう。時化が来ると、この暗礁の内海の島から島への渡しが一番先に途絶え、時化の後も長くむつかしい、と船頭がいっていた訳が仕事柄少し

は海を知った彼にはよくわかる。現に、前任者の井上は半年ほど前、その年最後の台風の折に、一寸無理して島から小船を出しあっ気なく海で死んだそうな。ついに行方は知れずにいるが、船が覆った後の乗り手を、無数の暗礁がどのように嘖(さいな)んだろうかは、想うに易かった。

幾つめかの離れ小島を過ぎ、すでに西表に近い経度で船はゆるやかに吹いている風に向って真向いに航路をとり直した。島は八重山の内海の最南端に近く外縁の環礁の間近に在った。

内海に無数にある暗礁のひとつが何かでひと際隆起し、周りの珊瑚礁を従えて島にまで育った。眺めた印象は、大小の差はあれ他の大方の離れ島と殆ど同じだった。島は、巨きな星雲の中の小宇宙のように、他の島に似て来るものを拒むよう周囲に珊瑚礁を巡らし、穏やかな内海の中で尚はるかに隔たれて見える。

島に近づくにつれて本性を現すように黄褐色に変り、最後は荒々しく黒味を帯びた濃い褐色の凹凸になって水からたち上り、島を囲んで見せる平たいが嶮しい磯。その奥に、隆起して干上り今は変色した古い珊瑚の岩々に仕切られながら断続してつづく海岸線の半ばを占める真っ白な砂浜。そしてそのすぐ背後に、白い砂を憧れて来るものを脅すように、小高く嶮しい古い岩盤がそそり立ち島を巻いている。

そのさらに上には、ところによっては岩の足元にとどきそうにたわわな緑が覆い、目立つようなさして高い木も見えぬ島の緑は、黒い岩と白い砂をはさんで、きらめく水とは対照に単調でうっとうしいほど密々に見えた。

明和年間の大津波で辺りの島ともども全滅するまでは、この内海の神事の司の島として人口四百を数えたと聞いたが、そんな名残りの気配は海から眺めてどこにもない。その後新しい移住者を迎えたが、時代の波に逆らえず近年とみに過疎となり、今では六家族十七人の人口の離れ小島になっている。

しかし水の上から眺める限りその十七人の影も見えず、島は過疎というより、これから新しい客の到来を待って開かれようとしている処女地にさえ見えた。

西側の珊瑚礁がゆるやかに窪んだ奥の砂地に、砕いて荒く積んだ珊瑚の岩をセメントで雑に固めた船着場があった。近くの船だまりにくり船（サバニ）が三隻、水中に打った杭に舫いをとり、片方は船着場の岩に打ったくさびに結ばれている。

陸に一人五十がらみの男が、足元に革の古い書類鞄を置いて立っていた。艫から小さな錨を落した後、船頭がものもいわず投げた舫い綱を男は一度とり落した後、拾い直し足元のくさびにくくりつける。仕草は船に馴れているとは見えなかった。

陸へ下り立ち、男の終えた舫いを手直しした後、船頭は初めて相手と口を利いた。三言四言、彼には全く聞きとれぬ島の方言で話し合った後、二人は改めて島への客を確かめるようにふり返った。

「あんた、泊るのよね、島に」

頷いた彼へ、

「どれほどの間です」
陸にいた男が聞いた。
「仕事が片づくまでと思っていますが」
「すると、あんたは」
いぶかるように一寸眉をひそめながら、男はいった。
「ええ、前にいた井上の後に」
「ああ、そうね」
男は彼が答えたとは違う何かを納得したように頷き、その後気づいたように微笑して見せた。その微笑には島への客を迎える、というより、この地方の人間たちが見知らぬ相手に向い合った時よく浮べる、何故か知らぬが臆しておびえながら相手をうかがうような影があった。
「部落は」
尋ねた彼に、男は船着場につづいた小道の奥を指した。
「前の人と同じ家に住むのね」
「いや、よくわかりませんが、誰かに聞いてと思って」
「私が教えよう」
男は足元の書類鞄を置いたまま彼が船から上げた三つの荷の内の一つを手にして促した。男は石垣へ折り返す船の客らしく、船頭に何かことわると先に立って歩き出す。
尾いていく彼の背に、

「学校の校長先生よね、この人は」
船頭が告げて教えた。
「誰が来るのかと思ったが、丁度あんたの船の便があったので、今日の内に石垣の教育委員会へいくのよ」
男は彼が乗って来た船の帰りをただで利用することで負うているものを明かすように会釈して見せた。
砕けた珊瑚礁を積んだ船着場の基部に、そこが島に住む人間たちにとって大切な施設であることを示すように、隆起した古い珊瑚の岩礁から砕いて採った後、四角に切り直し表をならした石を敷きつめた一間四方ほどの石畳がある。その先からはもう、岩の砕けた砂の入り混ったただの土の道だった。
道は、船着場についた人間の目から島の内側を隠すように、水際まで生い茂ったギンネムの茂みの中ですぐに一度斜めに折れた後、真っ直ぐにつづいている。
島で初めて目にしたモンパの木の下でふり返って見たが、細い道はたわわに蔽ったギンネムの茂みの中に吸いこまれたようで、息苦しいほど密々の緑に海から仕切られた内側は、来る途中水の上で見た明るい遠景とは違って、同じきらめく陽光の下ながら、隔絶された全く別の世界を想わせた。
この南の島々では年中咲いているハマアサガオのつると花をからませて立つガンチョギや、背高くはなくても幅狭い道を覆うように、茂りに茂ったギンネムは今にも道を塞ぎそうで、風の通

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

わぬ島の道は、猖獗する緑の中で人間を溺れさせそうにも見える。
突然たち止ってふり返ると、
「私、城間いいます」
名乗った後、
「すると、会社はあの仕事をつづけるつもりなんね」
校長はいった。
「ええ、御迷惑でしょうか。私たちもあくまで、みなさんとの話し合いの上でということですが」
「誰より何より、県は喜ぶでしょうが。教育委員会も。学校に限っていっても、生徒三人に先生一人の学校だから。ま、私らは助かるわね。こんな過疎の島のものが、うまくどこかへ移れるなり、集められれば」
「じゃ、校長先生は賛成して頂ける訳ですね」
着いて早々の仕事に気負っていいかける彼をかわすように背を向けると、
「私はこの島のものじゃないものね。島のことは、島の人でないと」
城間はいった。
ギンネムの厚い藪が少し薄れ、道の向うに牧草地のような平たい草地が開けて来た辺りに、島が隆起の際そこに突出したのか、人の背ほどの古い珊瑚礁の岩が土の中から顔を出し、その上に根を張ったガジュマルの樹がそびえて見えた。

海から来た人間には見過されそうな角度の樹と岩の蔭の辺りに、何のためにか一米ほどの小高い土饅頭が見えた。辺りを掘ればそんな土が出るのか、歩いて来た道の砂っぽい土の色とは違った、黒々した盛り上りだった。それをかまえるために、周りのギンネムや雑草をわざわざ苅った気配もある。頭上のガジュマルにからんだ花が偶然散って落ちたか、それとも誰かが千切ってそこに置いたのか、白いハマアサガオの花が二輪、土饅頭の頂上にかかっていた。

「あれは、何ですか」

いきすぎようとした城間に質して見た。その声が聞こえなかったように歩みを止めぬ相手に、

「校長先生」

もう一度かけた声にふり返ると、先刻見せたと同じく、いぶかり臆したように眉をひそめながら、

「あ、あれね」

城間は頷いて見せた。

「人魚の墓ち、島の人はいうね」

「へえ。でも、人魚ってどんな」

質した彼へ、額にかかる陽の光がまぶしいような表情で瞬きすると、

「いい伝えかね。この島も、古いから」

そのまま話の腰を折るように背を向けると城間は歩き出した。

ギンネムの茂みがつき、道は昔何か大がかりに栽培するため開墾されたらしい平地に出る。一度放り出した後また思い直してやり出したように、平地の一部にサツマ芋と落花生の畠が見えた。

どちらも葉に勢いはなく、地味は痩せて見えた。
平地の向うの茂みごしに、二つ三つ赤っぽい琉球瓦を漆喰でとめた屋根が見えた。部落の入口と覚しい、他の小道が交わる辺りで、右手から牛を曳いた二人が現れた。束ねた雑木を裸のやせた牛の背にくくりつけ、女がその綱を手にし、先だつ男は煙草をくわえ鉈を片手にしている。
男は二人を確かめるように立ち止り女がそれに習って歩みを止め、同じように牛も立ち止り道端の草を喰んだ。四人は一寸の間、見つめ合うようにして黙ったまま立っていた。
気がねしたような、いい訳するような声で校長が先に声をかけた。方言の意味はわからなくとも、案内人が島の住人に自分について説明しているのはわかった。
「ユンチの、島の長というかな、宮良部さん。こちら、井上さんの後に来た、ええと」
両者を引き合せるように城間はいった。
「高峯敏夫です。お世話になります」
「宮良部でございます」
男はかぶっていた、つばに穴が開いた古い麦藁帽をゆっくり外した後で頭を下げた。
帽子をとると男の右額上の頭から眉近くまで、古く大きな傷の痕が見えた。かなりの傷で、頭にかかる部分はその痕に髪も生えず地肌がむき出しになったまま陽焼けしている。思わぬ外来者を前に、人見知りというよりおずおずとも見える男の印象にその傷は似合わず、ふと、他から遠く隔てられたこの貧しい島に暮している人間たちの生きざまを表わしているようにも見えた。
「井上さんの後にね」

男は反芻するようにくり返しながら、促すように従えた女にふり返り、女は男に習って、頬かむりした手拭いの上にかぶっていた麦藁帽を同じようにゆっくりした丁寧な手つきで外すと彼に向って頭を下げた。

「高峯敏夫さん、タカ子さん」

新来者を島民に紹介するのが自分の勤めのように、校長は几帳面に二人を引き合せた。

頭を下げ合った後、三人は一寸の間黙って立ったままでいた。何かいおうと努める彼の気配を察し、それに答えなくてはならぬことに臆したような曖昧な微笑で二人は彼を見つめていた。その眼ざしには、先刻船着場で初めて会った時城間が見せたと同じように、いわれもなくおびえながら相手をうかがうような影があった。そんな相手にどう声をかけていいかわからず、浮べ直した笑顔で彼が近づこうとすると、それから逃れるように二人は一歩すさって、前よりもおびえたような微笑で意味もなく頷いて見せた。

それは、その眼で迎えられる者を、いわれもなく加害者に感じさせるような、人間に打たれようとして身をすくませる弱い獣の眼ざしに似ていた。

「後で、改めて挨拶にうかがいますが、どうかよろしくお願いします」

いって頭を下げる彼に真似て、二人も同じように頭を下げ返しはしたが、仕草はただ相手に合わせたように無機的だった。

校長が方言で何かいい、男は短く答えて頷き、二人を先に促すように、黙って立ったまま見守っている。帽子をとった下の顔は、校長との仕事の違いを証すように陽焼けしきって年の頃がよ

くわからない。男は六十を出たかという感じだが、女の方は、かぶったままの手拭いのせいもあるが、若いのか年輩なのか見当がつかなかった。
「夫婦ですか、それとも親子ですか」
十八人しかいない住民の人間関係を今から覚えようとして質した彼へ、
「え」
突然聞かれたことがわからなかったように城間はふり向いたが、
「あ、いや、親子ですよ」
「すると、家には御主人が」
いぶかるように見返したが、思い直したように、
「ああ、あの人は独りでね。お嫁にいけぬ訳もあって。あの家も大変だから」
聞き耳たてる誰かを気にしたように、落した声で城間はいった。
重ねて質そうとした彼の気をそぐように、
「ほら。ここも空家でね」
傍らの、屋根と柱と床の根太だけを残し、後は白蟻に食われて建ち枯れた家を指すと、
「その気なら空家は他にいくつもあるから。尤も、井上さんはあの家に風呂をこしらえたのでね」
「風呂」
「ああ、この島には風呂というものがなかったんだがね。内地の人はそれじゃたまらんようで。

私らも本島の人間だけに風呂があるとなりゃ時々使わしてもらってたが」
「井上の、島での評判はどうだったんでしょう」
「評判」
一瞬立ち止り、驚いたように見つめ直したが、
「ああ、いや、いい人だったよね」
「ということは、仕事の方はうまくいってたんでしょうか」
「さあ、私はこの島のものでないのでね。まだ、住んでいる人間全部が決めた訳ではなかったのじゃないかな」
「それは聞いています。だから、途中で彼があんなことになったので、もう一度初めからやり直しですよ」
「あの人も、気の毒なことをしたものね」
いった後、校長は気にしたように彼を見直した。
「どんなことだったんです」
「いや、私は丁度その時島にはいなかった」
「海に出てと聞いたけど」
「ああ、そうらしいね」
「結局、遺体は上らなかった」
「ああ、そうね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com